角館の飾山囃子（おやまばやし）

――地方都市の祭礼――

松崎憲三

一　はじめに
二　飾山囃子の概観とアプローチの方法
三　飾山囃子の実態
(1)　張番の形態と機能
(2)　祭礼の担い手としての若者と無尽講
(3)　山車の曳き回しと祝祭空間
四　結びにかえて

一　はじめに

一九七〇年代、対象地域独自の分析視点の確立と、その視点からの当該地域の民俗文化の発見・再考を目ざして、「個別分析法」あるいは「地域民俗学」なるものが提唱された。[1] これは、従来民俗学がとってきた、個別民俗事象を伝承されている地域から切り離して類型化し、比較し、新旧を求めるという方法（重出立証法、文化周圏論）に対する批判から導き出されたもので、民俗をそれらが伝承されている地域の中において分析し、民俗の存在する意味を、それに即して明らかにするというものである。福田アジオがそうした批判の急先鋒であったが、しかし彼自身個別分析法に基づく具体的成果を示しておらず、個別分析法、地域民俗学に関しては、いつの間にかその主張自体も立ち消えになった感が強かった。

ところが、近年国立歴史民俗博物館が「日本文化における地域性」なるテーマを掲げたり、[2] 米山俊直が『小盆地宇宙と日本文化』を、あるいは大林太良が『東と西・海と山～日本の文化領域～』を著わして[3]以来、この問題が再びクローズアップされてきた。小稿の目的は角館の飾山囃子の分析に限定されるものであるが、最終的には、在郷町としての角館を中心とする地域の民俗文化の把握と、その中における飾山囃子の位置付けをするつもりであり、そうした意味で、この個別分析法との関係について言及しておきたい。

柳田国男が『都市と農村』を著わしたのは昭和四年（一九二九）である。柳田は国の本は農にあり、その頽廃は国の崩壊に通ずると考え、

ますます数を増す若い離村者を憂え、都市へ出て非生産者と化した農民の帰農の方途を探っている。[4] 同著で柳田の視点として注目されるのは、中小都市への着目である。柳田は、周辺農村の核として地方中小都市を位置づけ、それらが地方分権社会を形づくりながら連携するという構想を提言した。こうした発想は、現在米山が提唱する「小盆地宇宙」にも通ずるところがある。現在の社会状況を見ると、都市的人口密集地を中核として周辺の農村を統括するというように、都市と農村とはワンセットとなり、こうした都市＝農村の複合体としての周域圏によって国土は全面的に覆われている。この点に着目して提示されたのが米山俊直の「小盆地宇宙」論である。

米山によれば、日本文明が二つの中心（古代は九州北部と畿内、鎌倉時代以降は畿内と鎌倉乃至は江戸・東京）を持っていたのに対して、日本文化はその地形・気候の多様性を反映して、およそ百の地域単位を持ってきたのではないかという。このような日本文化の地域単位を「小盆地宇宙」と呼び、日本文化はおよそ百の「小盆地宇宙」によって構成され、二つの日本文明を支えているのだという。[5] 米山説は文明と文化の概念規定があいまいな点が否めないし、現実把握に基づく「小盆地宇宙」の実証的理解をいかに進めていくかが課題であるが、一元論的な日本文化論を排し、日本文化の地域的多様性、地域の個別性を把握しうる可能性を持つものとして評価できる。

米山の唱える「小盆地宇宙」論の実証的理解という点で参考になるのは『古河市史民俗編』[6]だろう。古河は江戸時代の城下町であるとともに宿場町、港町でもあり、生業についても農業を包みながら武家、商家、職人その他の職種を多数入り込ませた複合都市としての性格を持っている。こうした特徴をふまえた上で、たえずマチとムラとの交流を意識し、両者を対比させながら、伝統的地方都市古河の民俗を捉えようとしたものである。この『古河市史民俗編』の有効性については既に論じているので、[7] 小稿の目的とする飾山囃子の実態分析という限定された課題との関係で言えば、松平誠「都市の社会集団(5)～秩父の祭りと生活集団～」が参考となる。[8] 同論文は、参与観察と対象集団の社会史的研究の二方法によって秩父祭にアプローチしたものである。松平は秩父市を図式化して四つのゾーンに先ず分けた。

(a) 町場（上、中、本町）―屋台を出す町内。
(b) 旧農村（宮地、中近、下郷）―屋台と笠、鉾を出す町内。
(c) 新開地一一ヶ町―花火町内。
(d) 周辺農村―神事、神幸祭に参加する町内。

こうして、秩父市街地及び周辺各地域がそれぞれの形で祭に参加していった歴史的経過を押さえた上で、このことは秩父の町が在郷町として発達してきたことと無関係ではなく、周辺地域を取り込みつつ祭を構成して行く様々な工夫が重ねられ、現在の形をとるに至ったと結論している。

秋田県仙北郡角館町は、近世佐竹北家の御陣屋があり、また一方では在郷町[9]として、周辺地域の商業活動の中核として機能してきた。従がって飾山囃子に際しても、農地解放前までは、地主が中心となって

出す山車の曳き手・担ぎ手として周辺の小作が出仕したし、神幸祭への奉仕も周辺農村の人々がしてきた。また、田沢湖町神代、西木村桧木内・西明寺・小山田、角館町雲然田中他角館町の在の地域から囃子方や手踊り会が参加している。さらに、周辺地域から家族ぐるみで祭に繰り出しているのである。それ故周辺地域とのかかわりを抜きにしては飾山囃子の全体像は把握しえないことは言うまでもないが、小稿ではとりあえず角館という町場を中心に展開する部分に焦点を当ててみたい。

二　飾山囃子の概観とアプローチの方法

角館町そのものについて先ず概要を述べておこう。十五、六世紀、戸沢氏が角館城によってこの地方を支配したが、慶長三年（一六〇三）その戸沢氏に代わって角館城主となった芦名氏が古城山北側にあった町を南側に移し、元和六年（一六二〇）、に完成した。芦名氏は五一年間で断絶し、佐竹氏が所預りとして引き継ぎ、以後佐竹北家の城下町（陣屋）として廃藩まで続く。[10]

角館の町割は、南北に長い地形を利用して古城山南麓の御陣屋からT字型屈曲を持つ主要道路を南に延ばし、中間に設けた火除け（火除地）と呼ぶ防火帯を境として北に内町（侍町）、南に外町（町人町）を配している。外町はさらに通りを挟んで三〇から七〇戸より成る丁内に分かれていた。この丁内は藩制時代の一つのコミュニティで、丁内意識も強く、少なくとも大正時代までは子供達も他の丁内の者とは遊ばなかったと伝えられている。近世来飾山囃子はこの外町九丁を中心に維持されて来たのである。

さてその飾山囃子とは、角館町の総鎮守神明社と薬師堂の秋祭のこ

写真1　神　明　社

写真2　薬　師　堂

とをさしている。神明社は佐竹氏統治以後鎮守社として定められたものであり、薬師堂は角館の町建設以前、勝楽村と呼ばれていた頃から存在するもので、元々別々に祭が行なわれていたが、氏子地域が重なることもあって、享保十七年（一七三二）以降同じ日程で行なわれるようになったものである。[11] 現在祭日は九月七、八、九日の三日間で、七、八日が神明社の、八、九日が薬師堂の祭日とされている。氏子の組織単位は丁内で、丁内毎に張番と呼ぶ所謂「お神酒所」を設け、神明社の神輿、薬師堂のお薬師様の渡御を迎えるほか、山車の統制も行なう。近年山車を丁内から切り離して若衆の管轄下に移行させたため、張番の権限は薄らいだと言われるが、祭に際してはまだ相当の権限を維持している。

その若衆の管轄化にある山車とは曳山車をさすが、ほかに三基の置山を設けている。曳山は四～五トンほどの杉乃至は楢を用いた木造のもの。竹で形を造った上を黒い木錦で覆った岩山を型取り、二躰か三躰の人形を飾る（横町の場合は、前の二躰は武者人形、後の一躰はオリッコ＝道化と決まっている。但し演目は毎年異なる）。山の頂には杉と松の依代を置き、囃子方が中に入って飾山囃子を奏し、前面の舞台で手踊りが踊られる。古くは担ぎ山車であったものが明治二十五年（一八九一）から曳山が登場したことは、佐竹北家日記の同年旧八月六日（九月二六日）の記載によって判明する。[12]

郷社神明社之御輿行幸ニ付表御門ニ於テ方々様御拝被遊例之通御初穂白米二升金二銭午后二時ニ候西勝楽町踊山上ル是レハ車ニテ牽キ芸者ニ十五人参リ同様衣類ニテ皆花笠ヲカブリ内四名ハ三味線ヲ持ツ二名ハ太鼓ヲ打ツ二名ツヽ御橋ノ上ニテ手踊ヲ御覧ニ入候、午后三時頃也否ヤ七日町飾山上ル是レハ神后武内三韓ヨリ凱旋之場、右ニ山帰ルヤ否ヤ横町飾山上ル（木綿七十反カヽリタル由）是レハ御所桜堀川夜討之場帰ルヤ否ヤ岩瀬町飾山上ル是レハ市原野御狩之場（此ノ山ハ木綿百反カヽリタル由）右同様下新町飾山上ル是レハ大和名剱水見出生之場（木綿七十反カヽリタル由）午后四時頃也、同五時頃下中町飾山上ル是レハ新田義貞投剱稲村ケ崎ノ場右六山御覧被成候こと〳〵ニ清酒五升つゝ被下候

西勝楽町ハ中町石川衆、七日町ハ二丸衆、横町ハ武村衆、岩瀬

町ハ三星衆、下新町ハ久田衆、下中町ハ宮田衆
同廿七日午后薬師ノ神輿巡行例之通御初穂一銭五厘白米二升御供ニ
候

このように木綿七十反から百反もかかる大がかりな飾山をつくるようになって、曳山車へと移行せざるをえなかったと思われるが、明治末から大正初期にかけて電線が張り巡らされるに及び、担ぎ山から曳山車への移行に拍車がかけられた。戦前まで曳山車の数はせいぜい七、八台だったとされているが、昭和六十三年は一六台で、七日夕刻に神明社、八日の日中に佐竹邸、九日夜に薬師堂へ参拝するほか、氏子丁内を順次練り回る。路上で二台が出会うと優先通行権をめぐって交渉があり、双方の条件がまとまらないと押し通ることになり、その結果山車ブッケ（山車ぶっつけ）となる。特に九日深夜から十日早朝にかけては圧巻で、祭のクライマックスとなる。

尚、昭和三十年代半ばから、八日の夜には時間を定めて十万人近く訪れる観光客用に、一つのショウとして形式的な山車ブッケをして見せている。

この飾山囃子は中村孚美によって逸早く紹介されたが、中村論文は都市の民俗学的研究の端緒となり[13]、それ以後、都市における祭礼の研究が盛んになっていった。都市の祭礼を見ていくと、祭祀形態一つをとっても、都市の歴史性・社会関係がそこに反映されている面があり、祭礼の比較から都市生活様式が把握できるという認識があったからにほかならない。中村は、一定のしきたりによって行なわれる山車の曳き回しに焦点を当て、参与観察によって飾山囃子の特徴を抽出しようとしたもので、中村によれば、

(a)　丁内が山車を出す単位である。但し祭礼の時のみ、その運営主体としての機能を果たす。

(b)　準備過程で気分が昂揚し、丁内意識が表われる。しかしこれは日常生活とは別の次元での激しい対抗であり、一種のゲームになっている。

(c)　丁内同志の対抗・交渉におけるかけひき、粘り強さの中に商家の主人として必要な気質（町の気風）が反映されている。

(d)　古い町の組織やしきたりを巧みにアレンジすることにより祭礼が成り立っている。

これが飾山囃子の特徴だという。中村の調査は一九六六年と一九六九年に行なわれたもので、その後の市域拡大に伴ない、新しい丁内も祭礼に参加したり、観光化に拍車がかかるなど、多かれ少なかれ祭礼の内容も変化を来たしている。また、中村論文は参与観察をもとに分析を試みたため、祭祀組織・社会関係についての把握が不充分である。そこで

。儀礼構成と祭祀空間（神明社、薬師堂、及び張番を中心とする各丁内のそれ）。
。祭礼のシンボルとしての山車・神輿の形態や巡行ルート等。
。祭祀組織（神明社、薬師堂、各丁内）。

。祭礼を通して見る地域の社会関係。

以上四つの視点から調査、分析を試みた。但し小稿では、丁内の動きを通してみた社会関係と、山車の曳き回しを中心に報告することにしたい。

三　飾山囃子の実態

(1)　張番の形態と機能

張番は祭礼の期間中丁内の祭典行事を司る所で、その進行について最高の権限と責任を持ち、年番長が責任者となる。

張番として設定される場所は、個人の家の店、又は座敷及び小店（こもせ）（雨降り、雪降りの時の通路となる庇下往来の土間）、あるいはガレージ等を借用して作る。張番外部の飾付は、ガレージや小店の外の両側柱からハの字型にススキ及びコマイで大網型に組んで縄で結ぶ。足下はエグレ（野芝）を敷く。こうして矢来を立て、矢来の上部に松、ネズホを添える。また、軒下左右に円型の箱提灯を、正面には張番立札を立てる（写真3参照）。内側は正面及び両側面の三面を木綿地藍染で模様抜き丁内印染抜の紐通しのついた垂幕を使用する。但し新しい丁内については、紅白の幕を用いている場合が多い。正面の祭檀前上部は揚巻結びとし、出入口も軒先上部に下げ幕を張り、中央を揚巻結びで飾る。[14] 祭檀は正面の壁に、多くは「天照皇太神」の掛軸を飾り、前に文箱や茶箱を置いて藍染木綿で覆って祭檀の台とし、三方を二ケ並べて向って右に鏡餅、左に山海の珍味を供え、前には御神酒徳利、灯明をそれぞれ二本ずつ左右に並べる（写真4）。掛軸については「春日明神・天照皇太神・八幡神」と三社の御霊を祀る所もあり、また、

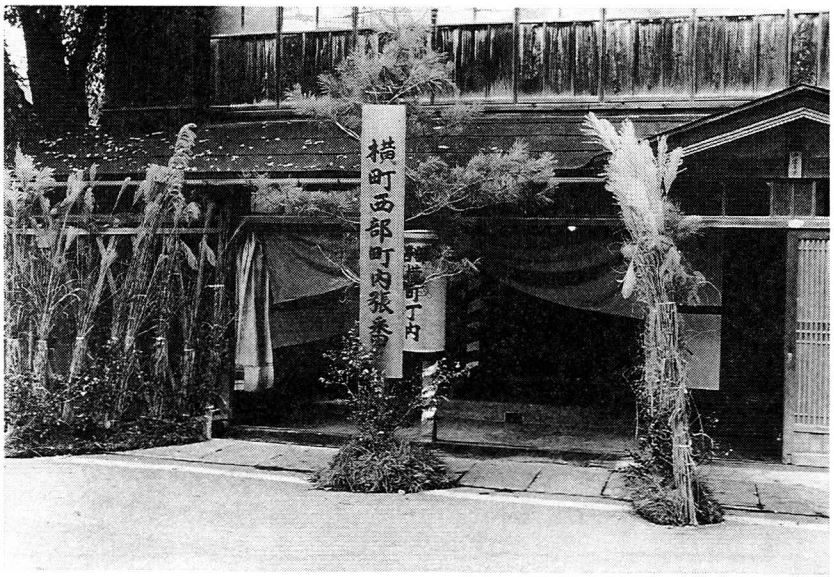


写真3　横町西部丁内張番

八日の神明社の神輿の渡御が終わると、これを薬師瑠璃光如来の掛軸に取り替える所もある。

さらに、張番の側壁には必ず二～四丁の弓張提灯が備えられており、いわばこれが張番のシンボルであり、年番長が山車の仲裁に入る時は必ずこれを持つ。しかし、祭礼の最高権威者であるところの年番長が、張番から自ら出て行く等ということはめったに無かった。時には他丁内の山車を預かることがあって、夜であればこの提灯を山車にさげておく。

昭和六十三年度は張番は全部で三二ヶ所に設置されていた（図1、表1参照）。一方山車は一六台、二八の丁内が出していた。これら数字上の不整合は、二つ以上の丁内が連合して山車を出したり、また山

写真4　横町東部丁内張番の祭檀

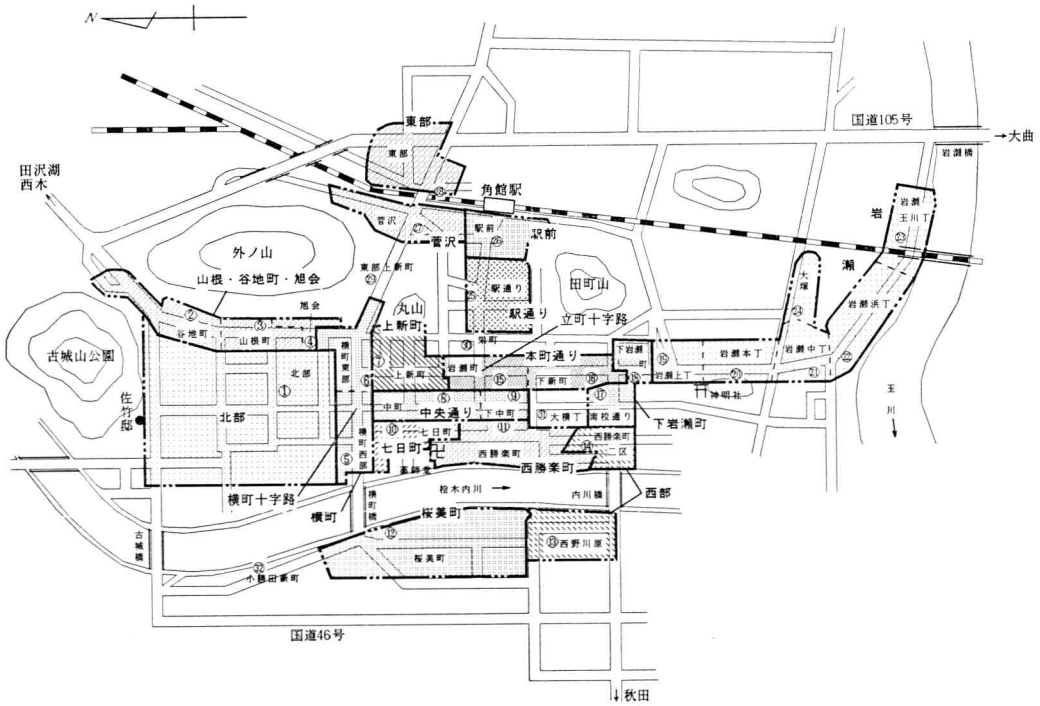


図1　張　番　配　置　図

表1　張番・曳山一覧表（昭和63年度）

	丁内張番名	曳山名	人形場面	囃子踊り
1	北部	北部	祇園祭礼信仰記	西木村上桧木内　鈴木組
2	谷地町	谷地町	甲陽軍艦 川中島の合戦	田沢湖町神代 穂月会 大山組
3	山根	山根		
4	旭会	旭会		
5	横町西部	横町	賤ヶ岳の合戦	角館町岩瀬字西下夕野 角館飾山囃子　手踊り会
6	横町東部			
7	上新町	上新町	小鍛冶	田沢湖町神代　津嶋組
8	中町	中央通り	太閤記 矢作橋	西木村西明寺 嶋村組
9	下中町			
10	七日町	七日町	後三年の役	田沢湖町神代　津嶋組
11	西勝楽町	西勝楽町	真田三代記	角館町雲然田中　秋月組
12	桜美町	桜美町	壇の浦の合戦 義経八艘飛	角館町 角館飾山囃子保存会
13	西野川原	西部	歌舞伎十八番 押戻し	角館町雲然田中 秋月会
14	西勝楽町二区			
15	岩瀬町	本町通り	義経千本桜 堀川館夜討の場	田沢湖町神代 神代芸能保存　嬉遊会
16	下新町			
17	南校通り	下岩瀬町	歌舞伎十八番 七つ面	田沢湖町神代 大山組
18	下岩瀬町			
19	岩瀬上丁	岩瀬	桶狭間の合戦	田沢湖町神代 穂月会 大山組
20	岩瀬本丁			
21	岩瀬中丁			
22	岩瀬浜丁			
23	岩瀬玉川丁			
24	大塚			
25	駅通り	駅通り	歌舞伎十八番　鳴神	田沢湖町神代 神代芸能保存　嬉遊会
26	駅前	駅前	吉野山合戦	西木村小山田　佐々木組
27	菅沢	菅沢	歌舞伎十八番　暫	角館町西長野鬼壁　黒坂組
28	東部	東部	三方ヶ原の合戦	角館町　角館飾山囃子保存会
29	東部上新町	—	—	—
30	栄丁			
31	大横丁			
32	小勝田新町			

置山・舞台一覧表

	丁内名	出し物（人形場面）	場所
大置山	岩瀬町	川中島の合戦	立町十字路
	岩瀬	仮名手本忠臣蔵　十段目　討入りの場	神明社前
	七日町西勝楽町	菅原伝授手習鑑「賀の祝」	薬師堂前
舞台	横町	民謡と手踊り	
	岩瀬	踊るサンライズショー	
	西勝楽町	猿倉人形芝居	
	岩瀬町	郷土芸能　おやま囃子	
	駅通り	民謡・歌謡・歌まつり	

車を出さない丁内でも張番だけ設けるというケースがあるからである。山車を出さない丁内は、東部上新町、栄町、大横丁、小勝田新町の四丁内である。北部、上新町、七日町、西勝楽町、駅通り、駅前、菅沢、東部、桜美町の九丁内は自丁内だけで山車を出しているが、その多くは人口増加の著しい新興住宅地域である。しかし、中には七日町のように三〇戸前後と少ない戸数の丁内が自前で出している場合もある。この丁内は大工さんが多く、いわばプロとしてのプライドから自前で出しているともいわれる。尚連合丁内で出車を出すようになった理由は、農地解放を契機に、祭礼の経費の大部分を負担する資産家がいなくなったこと、及び第二次大戦を境に、山車を曳く二十代後半から三十代前半のリーダが減ったことによるとされている。[15] ちなみに「丁内」と現在のいわゆる「〇〇町」との関係だが表1の丁内張番名（丁内）と曳山名（町名）に対応するとみてさしつかえない。

先に張番は丁内の祭典行事を司る所、と述べたが、張番はこの祭礼において絶対的な権限を持つ一方で、飾山囃子のメインとなる山車の曳き回しをスムーズに進行させる役割を負うているという意味で、祭礼の調整役、裏方に他ならない。しかし、数多い山車の動きに目配りしながら祭礼の雰囲気を盛り上げるのも張番（年番長）の役目であり、いわば祭礼の演出家ともいうべき存在なのである。加えて飾山囃子における張番は、他地域の祭礼における所謂神酒所と同じ機能を持ち合わせている。即ち、寄附金のやりとりやお神酒の交歓等があって地域の人々があわただしく出入りし、コミュニケーションのはかられる場ともなっているのである。

この他の張番の役割としてあげられるのは、予算の遂行（割当て、徴収、決算）と、自丁内曳山車への連絡及び手配、露店商への苦情処理、丁内として行なう催し物、舞台及び灯籠等祭具の維持管理等である。しかし、最も重要なのは、再三述べるように裏方に徹しつつ権威を最大限に発揮しうる、曳山車への対応であろう。この曳山車への対応だが、山車が丁内へ出入りする場合、決して張番に無断では出来ない。丁内境に一端山車を止め、交渉員が張番へ挨拶に出向いて許可を

得た上で出入する。丁内境は、外町九丁については、かつて水路が縦横に張り巡らされ、それが結界の目安となっていた。しかし、現在その多くが暗渠となってしまい非常にわかりにくくなってしまった。数少ないが丁内によっては、角灯籠や日の丸を道路中央に吊り下げていることもある。いずれにせよ、山車の責任者、交渉員はトラブルを避けるためにも丁内境を熟知していなければならないのである。しかし、暗渠になってしまったり屋敷地の分割・統合や新しい建物の建設等によって景観の変化が著しく、やむをえず十年程前から観光協会がメモを渡すようになってしまった。

いずれにせよ、丁内への出入に際しては山車の二人の交渉員及び責任者が張番へ出向き、小店等の土間にしゃがみ込んで三っ指をついて挨拶の口上を述べなければならない。最近ではその時膝をついて口上を述べる者がいるが、膝はつかないのが本来の姿だという。交渉員が帰った後、「今時の若い連中は挨拶の仕方も知らない。まるで謝っているみたいではないか」と年番長のぼやく声も聞かれた。どこの張番も挨拶に来た山車に対しては、その位置を確認してすみやかに通過するよう指示を与えていたが、先に他丁内の山車が入っている場合には、トラブルを避けるためなかなか許可を出さない。「〇〇の年は張番がしっかりしていたので、山車ブッケの回数が少なかった」という話をある年番の人から聞いた。「この頃はやたらに山車ブッケをするようになったが、山車ブッケは本当にやむを得ない時だけするものだ」とは、その年番の人の自論だが、通りすがりの調査者としては、あるいは観光客もそうだろうが、ついつい熱気あふれる山車ブッケを期待してしまう。いや我々以上にそれを望んでいるのは、山車を曳き回している各丁内の若者達に他ならないのである。その点については(3)節で触れることとし、次に横町西部丁内、横町東部丁内及び下新町、岩瀬町の張番を例に、その具体的な運営について見ることにしたい。

横町は、横町若者として山車を一基出しているが、張番の方は横町東部丁内と横町西部丁内に分かれそれぞれに設けている。横町東部丁内の場合、三〇軒を家並順で三班に分け、年番は班単位で一年交替、年番長も各班から選出される。およそ四十二才で曳山車にかかわる若者から離脱し、顧問となる。そうした中で山車に精通している人や有力者が年番長に選ばれる。任期は特にない。一方横町西部丁内の場合は、先ず三人年番長が選ばれ、残り三三軒をクジ引きで三班に分ける。年番長三人は丁内の総会で決められるが、地付の資産家が選ばれ、こちらも任期は特にない。祭礼経費の徴収は、横町西部丁内の場合、曳山車協力費約一万、曳山維持費五、六万とその他若干がかかり、これを各戸に割り当てる。この他特別寄附と称して十三万円程飲食店等の店子から募る。その集め方は、総会で予算をはじいて、各戸の財力に応じて五段階にランクづけをする。下は五百円から上は五千六百円までで、ここ十年間は変化してないという。横町東部丁内の場合も、三〇軒に対する割立てと飲食店等の寄附でまかなっている。八月の盆すぎに当番の班で各戸別に額を決め、八月末の総会で決定する。ここ八年ほど変わっておらず、平等割二割、所得税割四割、固定資産税割四

割の比で各戸の割り立てをし、徴収している。このように横町の場合、東部丁内と西部丁内とに分立しており、多少の対抗意識を持ちつつ横町衆としての連帯感が強く、特に同じ山車を曳く若者にはそれが顕著である。勿論行政区画として一つの町を形成している訳であるが、行政末端組織としての機能は持ち合わせていない。町内会も従来は存在していなかった。ただし三年前、角館町の市街地調整将来計画に伴なう道路拡張計画が公表され、横町西部丁内がこれとからむことから町内会が結成された。但し、実質的にまだ機能していない。横町東部丁内の方は「町内会結成の話が持ち上がらない訳ではない」といった程度の状況である。行政との連絡調整は、もっぱら横町東部丁内の場合、町内連絡委員が当たっている。両丁内は横町としての連帯意識を持つ一方で、納税組合は別々にあって、冠婚葬祭等のつき合いも別々に行なっている。東西両丁内の境界は、かつては横町十字路であったが、戦前横町東部丁内の有力者F氏が他の横町東部丁内の人と折りが合わず、横町西部丁内に移ってしまった。その時からG酒店を境に分割する形になった。それが尾を引いていて「張番を一緒に出そう」という話が持ち上がっても、感情的なわだかまりを持つ年寄の反対にあって実現を見なかった。この両丁内は、張番をめぐって合体、分離を繰り返してきた模様で、その間の経過は横町西部丁内に保管されている史料によって判明する。

明治参拾五年舊暦八月三日改正

郷社祭典ニ付協議決定簿

若者長　武村総助

　　冨木庄助

若者副　柏谷忠四郎

　　伊藤萬之助

　　伊保徳治

　　柴田幸一郎

右丁内委員協議ノ上決定候事

一、郷社祭典ニ付本年ヨリ相改メ左ノ通リ年番相定メ祭典ニ付左ノ金額ヲ以テ年々年番ニ於テ出金可致相祭候事

一、祭典ニ付費用金額弐拾円以上トスヘキ事、但シ他町ヘ山手傳ニ参リ若シ本條以下ノ金相掛候時ハ年番ニ不抱銘々出金可致モノトス

一、年番割左ノ通リ

とあって、二九名、三一名と二組に分けて名が記されている。つまり東と西の丁内が一年おきに張番を設けて年番を務めたと思われるのである。但し東西の区分けは、若干名が住居と異なる丁内に組み込まれており、これは祭礼の経費を負担する有力者を二分した上で地域割りしたためと推測される。また、「横町町内　大正元年九月二十二日郷社・祭典　決議録」には次のように記されている。

記

大正元年九月廿二日横町丁内委員協議の上左之通リ決定ス

出席委員　冨木庄助

柏谷長右衛門
五井孫左衛門
岡田五郎兵衛
八柳吉蔵
藤原常吉
伊藤謙治
千葉喜代蔵
小林喜代吉
栗谷丹右衛門
高橋松治
伊藤真一
佐藤貞治
山田良之輔

郷社祭典ニ付キ明治三十五年度ヨリ年番ヲ東西両組ニ分チ各年番ニ於テ祭典費出金ノ所本年ヨリ東西併合ノ上抽籤ヲ以テ左之通リ年番ヲ相定ム

一、祭典費ハ町内一統ヨリ出金スルモノトス

とあり、八、九名ずつ七班に分けられている。そして大正十四年に再び改正があって、

一、郷社祭典ニ付大正元年度ヨリ年番ヲ七組ト定メ抽籤ヲ以テ交互ニ勤メ来リシトコロ本年度ヨリ左ノ標準ヲ以テ年番五組に分ケ抽籤ヲ以テ順番ヲ定ムルモノトス

冨木庄助
柏谷長右衛門
日辻市蔵
岡田五郎兵衛
五井孫左衛門

一、祭典費ハ年番ノ五人ガ總經費ノ三分ノ二ヲ出金シ　残三分ノ一ハ丁内一統ヨリ出金スルモノトス

とある。この時は経費の多くを、毎年交替で五人の有力者が年番長をつとめ、彼等が負担したのである。残りの三分の一の分担金の拠出方法については不明である。そうして戦前、先に触れたように東部丁内の人同士のいさかいから再び両丁内は分裂することになる。分裂後の西部丁内の状況は次の史料でわかる。

昭和貳拾参年九月十五日

郷社祭典諸係割當控

横町西部丁内

町祭典横町西部町内組会ヲ開キ本年ヨリノ運營ニ付キ町内總意ニテ決定事項

昭和二十三年九月三日

一、従前ノ年番長三名ノ内千葉サト藤田与一氏辞任ニ付キ總意ニテ之ヲ受理ス従ツテ岡田氏ノ年番長モ消滅セリ

二、全町内分ヲ三分シテ一組二組三組トシ、一組ヨリ順次祭典ノ年番ヲ勤ムルコト

三、組長ハ其ノ組ニテ組ノ總意ニ依リ決定ス
四、各組年番員・割当及本年ヨリノ祭典割当変更ニ付キ選与ニ依モ委員ヲ擧グルコトニ依リ選擧ノ結果左ノ人右委員ニ当選セリ
三浦　豊治　由利谷松治
熊谷寅次郎　松本　福蔵
千葉福四郎　栄木　熊蔵
大和田春治
以上七名ホ従前ノ年番長三名計十名ガ委員ト決定セリ但シ委員ノ任期ハ各組分ガ出来出金割当リツ決定マデトス
五、町内若者ニテ横町本西部ト合併シテ曳山ヲ出シタイ故其ノ経費約二万円カカル故当町内ヨリモ応援セラレタイトノ申込アリシ故之ニ応ズルコトトセリ　以上

第五項に関連する若者の動向は次節で見ることにする。以上の決定の後、早速改正委員会総会が開かれ、次の決定をみた。

改正委員会
一、九月六日午后八時ヨリ松本宅ニテ委員会ヲ開ク
二、組織協議ノ結果別紙新割通リ組員決定セリ
三、割当金額八%ニテ算出シ、岡田氏ヲ二五%トシ、最低九%ト定ム

第二次丁内総会
一、九月七日夜松本宅ニテ開ク
二、各組籤引ノ結果年番勤メノ順次ハ第一組（二十三年度）、第二組（二十四年度）、三組（二十五年度）ニ勤ムルコト
三、年番組及出金割当ハ一廻リ則チ（各一回宛）ニテ改正ノコト
四、年番組割当及出金割当%町内一般ノ承諾トナリタル故、改正委員会ハ解散ス
五、九月三日集会ノ五項若者ノ町内割当年ヨリ約七千五百円ヲ援助スルノ件ハ都合ニヨリ廃止セリ

以上のように十名の委員が改正案を練り、有力者の負担率と有力者を三組に分けて、その上で一般の家々の組割と負担金の割当を行ない、その案を丁内総会に提出して了承されたのである。年番長三名という決定がいつ頃なされたのか、この史料によっても明らかではない。負担金については、先に紹介したように五段階になっているが、三名の年番長を中心に三組に分けて順ぐりに年番を勤めるという形は、この史料に示されて以来変わっていない。

一方、現在本町通りとして山車を連合で出している下新町と岩瀬町は全く別の隣接する町（丁内）同士で、経費と人手（下新町二十戸、岩瀬町三八戸しかない）の制約から、昭和三十八年（一九五八）年以来曳山車の経費を折半にした上で連合して出すようになった。但し丁内山車[16]という訳でない。

さて下新町の場合、A家の倉庫を張番として用いている。張番の位置は、適当な場所があった場合にそこを利用するもので、毎年同じ場所を使える限り移動しない方針だという。但し万一A家に不祝儀があった場合、その年は場所を替える。経費については、昭和の初め頃か

ら現在の方法で割立を行なうようになったそうで、以前は各家の大きさ（間口三間半、奥行二五間が基本型）を基準に、八月の盆すぎの集会で提示できるように、年番長を中心に話し合いで決めていた。この決め方は時間と手間がかかる上に、長い年月の間に敷地の分割・統合が進んで変化も著しくなったため、現在の割当法に変わった。現在の割当法とは、平等割三割、所得税割三割五分、固定資産税割三割五分として全戸に割り当てるものである。この方法だと分担金を巡って紛糾することもなくすっきり決まるというので一般に歓迎されている。年番長はほぼ世襲制で五人が一年交替で勤めている。以前は七人だったそうだが跡継ぎがいなかったり、拒まれたりして五人に減ったといわれる。

一方の岩瀬町はT家の倉庫を張番としている。丁内二八戸を三等分し、その中から一名を年番長に選ぶというシステムをとっている。岩瀬町の場合も平等割一割、所得税割五割、固定資産税割四割の率で計算し、さらに法人に対しては二千円上積みするというものである。下新町と岩瀬町は隣り合わせでも別段深い交流がある訳ではない。祭礼を維持するには相方ともに戸数が少なく、経済的・人的負担からたまたま連合するに至っただけの話である。角館町もドーナツ化現象が進み桜美町、西野川原、菅沢、東部といった新興住宅地に比べ、旧市街地は下新町や岩瀬町同様の悩みを何処の町内も持っており、両町同様再編せざるを得ない時期が来るのかもしれないが、丁内意識の持ち合わせ如何と統率力を持つリーダーの判断にかかっているといえる。

以上、横町東西両丁内、下新町、岩瀬町について見てきたが、張番の場所選定は極めて便宜的でありながら固定傾向が強く、数丁内で年番が交替する都度変わるほかは、所有者に不祝儀があった場合のみ一年場所を変える程度である。また年番長の選定も、世襲制をとる丁内から班毎の輪番制をとる丁内、あるいは町会長が勤める所（例えば北部）というようにバリエーションがあるが、全体的に輪番制への動きが認められる。但し輪番制といっても、山車に精通し、財力と人徳のある少数者が交替しながら長年勤めるというもので、固定化傾向は否めない。しかし、「家」を背景とした世襲制と異なり、個人の資質が年番長になりうる資格のかなりの部分を占めているように思われる。経費の徴収についても、旧来の資産家負担形式から割当による方式への転換がはかられ、現在多くの丁内が、その配分に差はあれ、平等割・所得税割・固定資産税割を基本に各戸に割当てていることがわかった。しかし、新興の町内においては、全て平等負担にするか、あるいは奉賀帳を回して任意負担としているようである。

(2) 祭礼の担い手としての若者と無尽講

前節では、張番を中心に飾山囃子の実態を見てきたが、次にはこの祭礼の中心となる山車曳き廻しの主役を演ずる若者に焦点を当てて見たい。

現在丁内山車はわずかで、ほとんど丁内とは別組織の若者によってとりしきられている。こうした形になったのは、多くは戦後のことで

ある。昭和二十二年の農地解放を契機に地主という有力者を失ない、祭礼に要する経費の負担者がいなくなり、そのため山車を出す割当を大幅に変更し、また若者に山車を任せ、彼等が寄附を募って出すという形になった。さらに人手と経費の関係で複数の丁内が合同で山車を曳くという形を生み出した。

横町についていえば、昭和初期まで町内有力者が祭礼経費の多くを負担し、山車の責任者も年番長が勤めていた。ところが、横町西部丁内有力者を中心に、昭和八年に新しい山車を作った時から「横町協進会」が結成され[17]、丁内有志によって山車を出すようになった。それに対して横町東部丁内の有力者も山車をつくり、昭和十八年頃まで丁内から二台の山車を出すことがしばしばあった[18]。先に述べたように、この頃はちょうど東西両丁内の間に軋轢が生じ、対立が激しかった時期である。そうして戦後間もなく、東西の若者が協進会の山車を横町西部丁内有力者から借用し、昭和三十六年までそれを曳き回していた。昭和三十六年に協進会の山車が古くなったのを機にそれを譲り受け、と同時に「横町若者曳山新造委員会」を結成し昭和三十七年に完成をみた。この時「横町若者曳山新造委員会」が発展的に解消し、無尽講が結成された[19]。この無尽講は現在三九人のメンバーが加入しており、若者会無尽と称している。毎月一人三千円（うち千円は飲代）会費、抽選で三名が取り主となる。酒の飲める年（といっても中学校又は高校といった学校卒業の意に等しい）から加入、特に上限はないが四十二才が一応の目安。これとは別に昭和六十年に熟年会無尽が結成された。これは五十才以上の参加だけに掛金も毎月一万円と高い。会合は毎月二十五日、メンバー十二名のうち十名までが若者会無尽へも顔を出す。このほか毎月二十二日に三十才代を中心とする若者の中核メンバー十二名の寄り合いも持たれている[20]。各年齢層毎に無尽講が結成されているが、年齢階梯的秩序がある訳ではない。集まると飲んでは祭礼の話に終始する。そうした中で山車曳き回しの技術、相手山車との交渉、かけひきの仕方が伝授されるのである。またこうした交流を通して、連帯感が強化、確認されていくのであろう。そうでなければ山車の曳き回しや山車ブッケに必要な集中力・結束力は譲成できない。山車の曳き回しのもう一つの条件は、責任者の統率力であるが、これも豊富な経験者との交流の中から培われていくものと思われる。

無尽講の規約には、慶弔・火事・病気見舞等に関するものもあって、いわば町内会活動の一部を肩代わりしているものといえる。角館町には行政の末端組織としての町内会が結成されていない所も多い。町内会の一般的機能は(1)防災、(2)防犯、(3)交通安全、(4)掲示板の設置・管理、(5)募金への協力等もあるが、どこの町内会でもその事業として大きな位置を占めているのは(6)祭礼、(7)慶弔事業である。それらの最も重要な事業を、いわば無尽講が果たしていることになる。従って横町の無尽講は、実態としては経済的な講としてよりも社会的な講、あるいは後で述べるように信仰的な講としての色彩が強いといえる。なお、無尽講という名称を使うと否とにかかわらず、毎月一回若者が集まって交流するという形はどこの丁内にも存在する。

毎月の無尽講以外の横町若者の年間行事日程は次の通りである。[21]

七月五日―この日の無尽講において責任者(正一人、副二人)、若者頭(一人―連絡調整役)、会計係(三人)、少年係(三人)を決定。任期一年、これらの人々が以後一年の諸行事を担当する。

旧六月十四日―八坂神社祭礼。

お盆――歩行者天国。角館町一斉に行なうが、町内毎に管理。

八月末の日曜日―山車出し。

九月初頭―町内寄附集め。

九月七～九日―飾山囃子祭礼。

九月十一日―アトフキ(祭礼反省会)。

九月末日～十月初頭―慰安旅行。

正月元旦―新年会。

二月十四日―火振りカマクラ。

四月下旬～五月上旬―花見。

これによれば、七月五日の無尽講は飾山囃子のためのいわば準備会であり、飾山囃子を根底から支えているのが他ならぬこの無尽講という意味で、信仰的な講にも近いといえる。また、旧六月十四日は八坂神社の祭礼で、別名「キュウリマチ」とも言っていた。H家個人持であったが十二、三年前から若者に管理が任された。かつては露店が出たり、角館の各地から参詣者が出向いてきたが、今は若者を中心に祭儀を執行しているだけである。飾山囃子の山車曳き回しの出発に際しては、先ずここに集まって酒を吸み交わし、最初に手踊りを奉納し、三日目の最後にもここまでやって来て手踊りを奉納した上で山車を納める。つまり、八坂神社は今や横町若者を結集するシンボル的存在になっているのである。

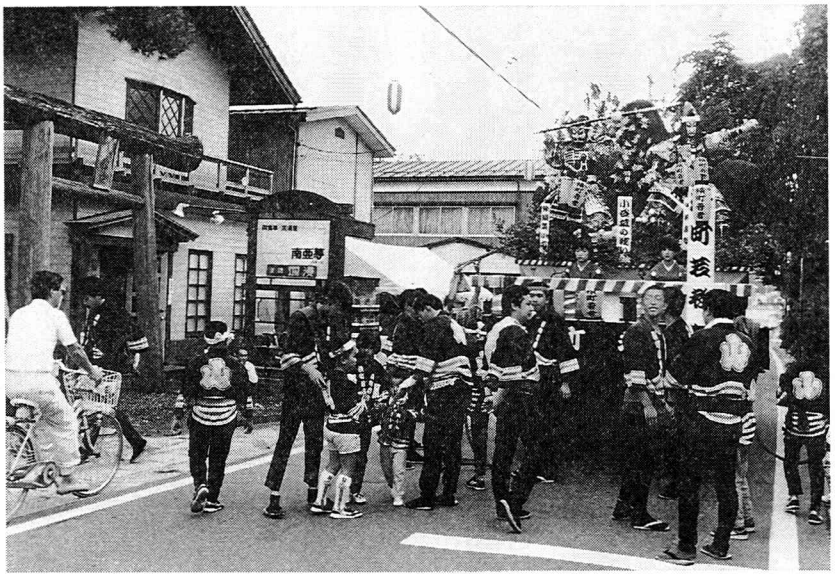


写真5　横町若者のシンボル八坂神社。山車の曳き回しもここから出発する

横町若者の年中行事の全体構成を見ると、ほとんどが飾山囃子関連行事によって占められている。それに対応して盛大なのは四月下旬から五月上旬にかけて行なわれる花見である。横町若者のS氏からの手紙に次のように書かれていた。「皆、私のことをお祭男にお祭馬鹿と言っています。私はそうは思っていません。ただこの角館に生まれて何の楽しみがあると思う。今は桜が咲いているぐらいで、あとはお祭だけなんですよこの街は。東京は年中眠ることの知らない街でしょう。この街はこの二つ以外の時は眠っているんですよ。仕事、仕事って働いて、家の為・家族の為頑張って、俺の休める時はお祭りをしている時とお祭の話をしている時なんですよ。町内の人と一つの物言をする時ってそんなにないでしょうし。お祭の三日間はだから全力でぶつかるのです。東京の人達にはわからないと思うけど……」。

角館の町は、飾山囃子が終わると、短い秋が足早に通り過ぎ、長く厳しい冬に閉ざされる。角館に居住する人々にとって、飾山囃子は一年の活動力、エネルギーを燃焼させる最後の機会であり、束の間の連帯感を味わう数少ない機会なのである。一方の花見に於ける賑やかし、というよりドンチャン騒ぎは、待ちわびた春の倒来に対するごく自然な心情表現に他ならない。単調な日常生活がこの二つによってリズムづけられていることは明らかだが、毎月の無尽講における話題や、他出した人が盆・正月に帰省しなくとも、飾山囃子の時はオジ、オバの危篤を偽るというように多少の無理をしても必ず帰省するという人も少なくないことなどから、角館居住者のみならず離郷者にとっても、この飾山囃子がどれほどの位置を占めているかがわかるというものである。

(3)　山車の曳き回しと祝祭空間

角館の飾山囃子は単に山車を巡行させるのみならず、山車ブッケをする点に特徴がある。ちなみに同じような祭礼は管見の及ぶ範囲では東北、中部地方に散見される。例えば福島県会津田島町の祇園祭では昭和二十年頃までは行なわれていた模様である。[22] また、長野県穂高町の御船祭では現在でも行なわれている。九月二十六、七の例大祭を御船祭と称しているが、穂高区、両町区では船形の檀尻を作って曳き回した上で、そのぶっつけ合いをするという。[23] 福島県の東和町にもあるようだが、会津田島町祇園祭の場合多い時で山車が四基、穂高町の場合は二基によるぶっつけ合いであり、十六基に及ぶ山車が三日間に亘って練り歩き、ぶっつけ合いをするというのは類を見ない。但し山車の曳き回しそのものについては、中村や山車の曳き回し経験者等のレポートに生々しく描かれていることから、[24] ここでは山車ブッケの歴史を素描した上で、九月七日、八日、九日と山車の参詣対象が変わる毎に、つまり祭の焦点が変わる毎に角館の町そのものの様相も刻々と変化して行く、その移り変わりを追いながら共同研究の課題に少なからず応えたい。

飾山囃子における山車の数は現在十六基と多い。しかし、戦前は七、八基しか出なかった。そのことについては先に触れた通りだが、昭和

写真6　神明社前の置山

三十五年九月付の地元紙『北仙民友』には、「置山二ツ、舞台六ツ、引山は八ツは確實」という見出しがある。ところが昭和三十八年九月八日付『北仙民友』の『置山、ひき山、舞台一覧表』では曳き山車十一基、四十八年九月七日付のそれでは十三基、五十八年九月七日付の記事では十五基となり、五年前に東部丁内（横町東部丁内とは別）の山車が加わって現在に至っている。つまり、高度経済成長期に徐々に増えていったことになる。東部丁内の場合、菅沢から住宅地が広がってJRの線路を越えて延びていった地域で、菅沢の山車に加わっていたが、戸数が増えたので駅通りの山車を譲り受けて、独自に曳き回すようにしたものである。新しい町内は、古い山車を譲り受けて操作法を修得した上で新しいものに造りかえるのが一般的傾向である。ちなみに現在新しい山車を造ると二百二十万円程度の経費がかかる。二十五年前、北部丁内が山車を曳くようになった時もやはり中央通りから譲り受けた。北部丁内はかつての内町（侍町）で、山車がない時分には隣接する丁内の曳き回しに加わっていた。ところが若者の間で自分達も出したいとの声が上がり、年寄達を説得したが「当方は祭を見る側」と一蹴された。それでもあきらめずに説き回り、遂に年寄の有力者の「若い者がやりたがっているのに反対するいわれもない」の一言で納得し、佐竹の殿様（先代）も快諾してくれたので出すことが決まったと伝えられている。しかし今でも「当方は見る側」と主張して祭礼の負担金を払わない頑固な人もいるという。

ところで、現在の山車は楢材を使っており、非常に重い。これは山車ブッケが流行り出してから使うようになったもので、以前は杉材を用いていた。道路が舗装されておらず、人手も少なかったから軽い材が用いられたのである。ところが近年は山車を造りかえるたびに、材を太く、腰を高くする傾向が強い。勿論山車ブッケに有利なようにそうするのだが腰を高くするにも、肩を入れて転回させるためにおのずと限度がある。現在の山車ブッケは、相手の山車の上に乗っかって押した方が勝ちとなっており、双方が乗っかり合って、相手方のそれをはずそうとして揺する。押す力と揺する力の関係で勝負が決まる。こうした形の山ブッケの方法は、昭和三十九年の東京オリンピックの前頃あみ出され、流行っていったという。それ以前は、ただ単に多人数でぶっけて押し合う形のもので、ぶっけ合いもめったになく、一年に

一回もあれば良かったという。山車ブッケをゲームとして見た場合、言うまでもなく現在の形の方がスリルに満ちているし、しかも長い時間熱狂できる。しかし、かつて町内山車を出していた頃、山車を壊して帰りでもすれば、年番長や年寄からこっぴどくしかられたそうだし、山車ブッケは交渉がこじれてやむを得ない時のみするもので、丁内を賑やかしながら神明社や薬師さまに参詣し無事帰るようにすべきものだった。そうした伝統をふまえて山車の曳き回しをしようとする穏健派と、是が非でも山車ブッケをするべきだとする熱気あふれる

写真7　山車の通行権をめぐる交渉

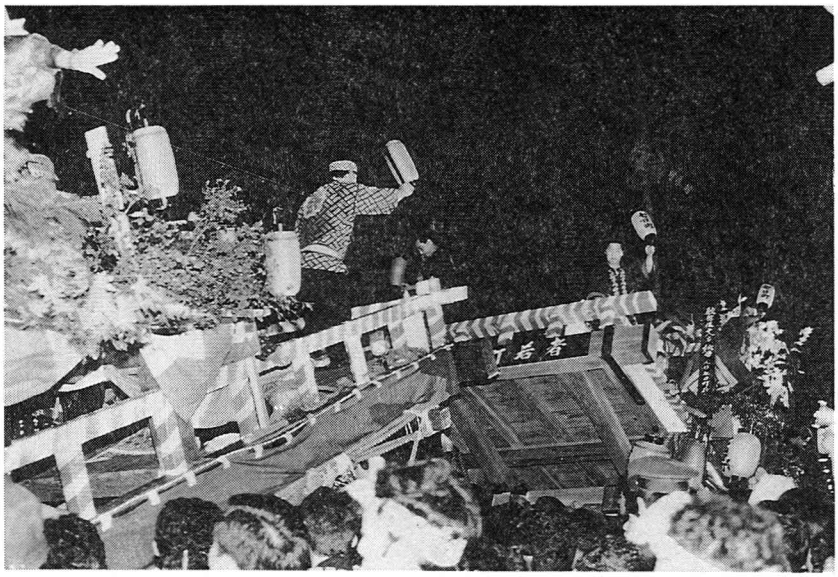
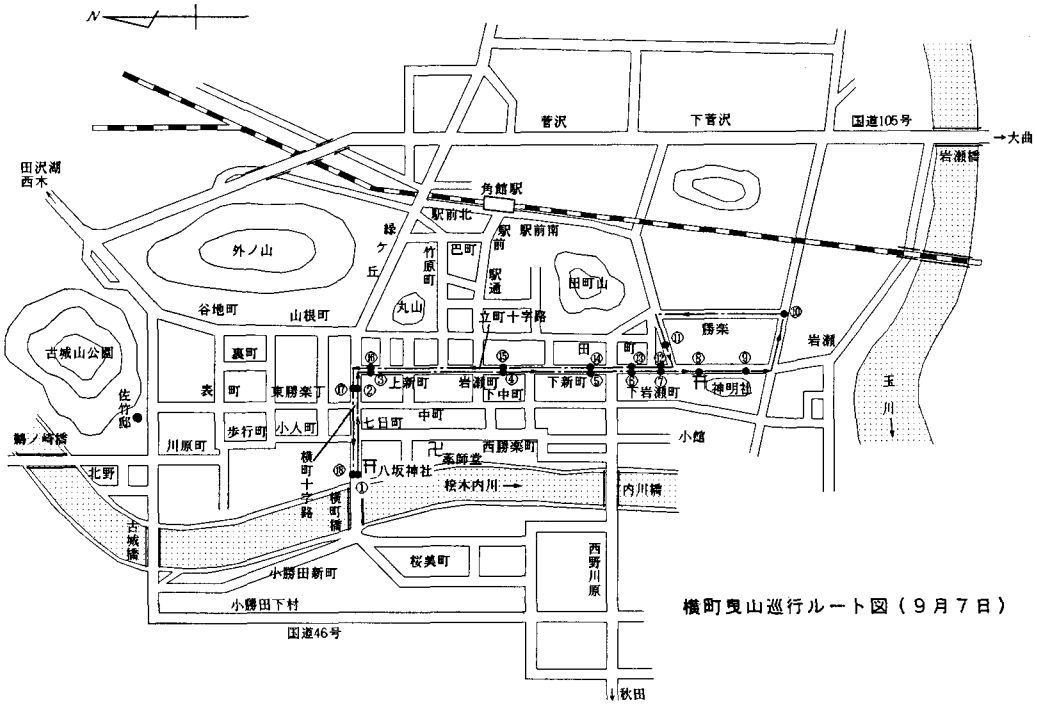
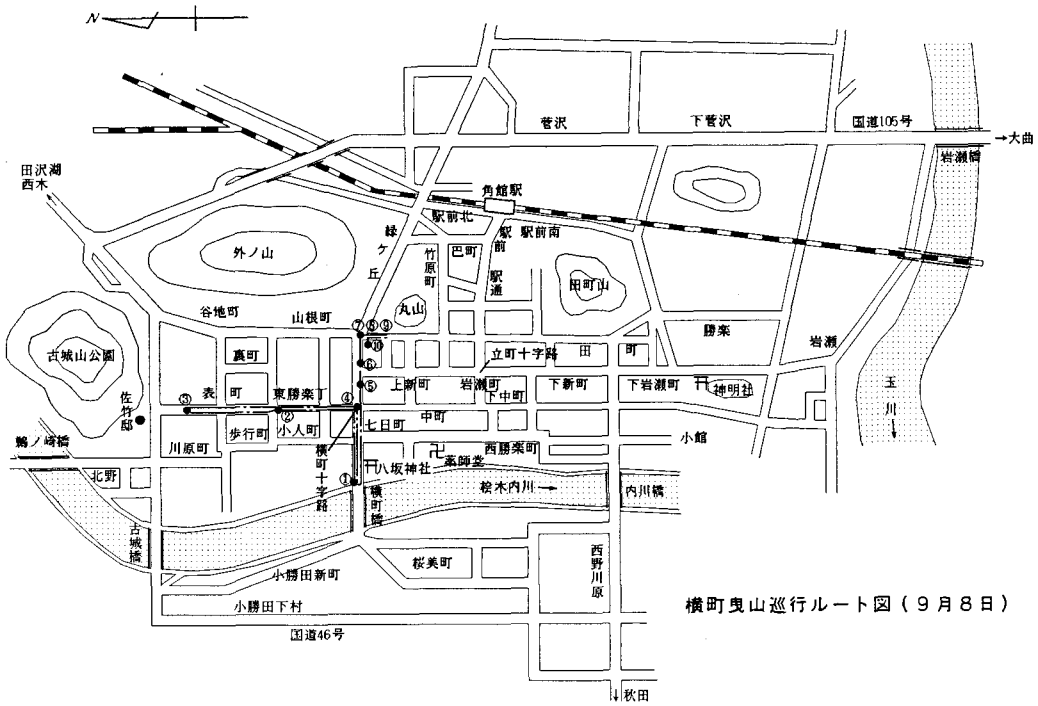


写真8　交渉決裂後の山車ブッケ



横町曳山巡行ルート図（９月７日）

図2　横町曳山巡行ルート図（９月７日）



横町曳山巡行ルート図（９月８日）

図3　横町曳山巡行ルート図（９月８日）

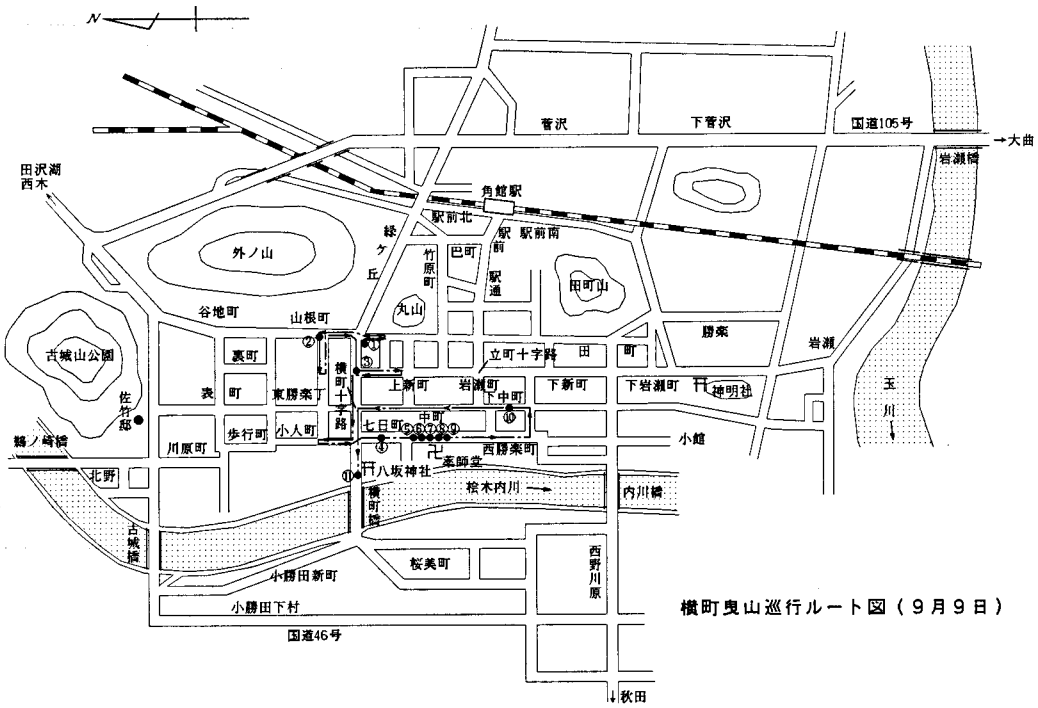


図４　横町曳山巡行ルート図（９月９日）

若者のいわば武闘派との間で、曳き回しのさ中しばしば意見の対立を見る。こうした対立を束ねるのがほかならぬ曳山責任者である。従って曳山責任者は統率力を必要とするが、さらには相手の山車の動きを読み、有利に交渉を進めるために、知力・判断力・決断力が不可欠である。

昭和六十三年の横町の山車の曳き回しルートは図２～４の通りである。横町の場合、ここ何年かそのルートを変えていない。七日夕刻から神明社参詣、八日午後から佐竹邸上覧、九日夕刻から薬師参詣と決まっている。特に九日夜の薬師参詣は欠かせず（前日のうちに参詣を済ます山車もある）、いかなる事情があろうと参詣できなければ、翌年山車を出せないルールとなっているからで、この参詣を終えると山車の行動は制約されず、宿敵の山車を有利な位置でとらえて山車ブッケをする。そこに至る作戦と相手の動きの見極め、タイミングが勝負を左右する。この年の横町の山車は、薬師さま参詣直後、タイミングよく宿敵岩瀬町の山車と遭遇。今一歩の差で薬師さまの参詣に遅れをとってしまう所だった。通行権をめぐる六回の交渉の末決裂、山車ブッケの体勢に入る。「下り山車[25]の時のお囃子のリズムが良いのは、神明・佐竹・薬師のそれぞれのカミサマが山車の人形に入って、山車に元気が出るからだ」といい、そうした神霊の加護を受けて山車ブッケにも力が入る。「ヨイサー、ヨイサー」と掛け声をかけ、士気を鼓舞させつつタイミングを合わせ「ヨイサノサー」の号令の下、山車をぶっけ合う。力が拮抗すれば膠着状態となり、一時間ほど力をふりしぼ

ってはもみ合い、交渉をし直したり、一時間ほど休憩し、車座になって山車の周りで酒を飲んだり腹ごしらえをし、また押し合い揉み合う。横町と岩瀬の対決は延々四時間に及ぶ睨み合いの末、決着がつかず、和解交渉の末相方譲り合っての交差ということになった。

山車ブッケの場合、兄弟山というのがあって、挟み打ちにしたり、二基の山車で相手にぶつかったり、人手を貸すということも行なわれる。横町の兄弟山車は西部、七日町、西勝楽町で、特に西部との友好関係が強い。かつて西部の山車の車輪がこわれた時に横町が貸してやったといい、それを契機にこうした関係が結ばれた。一方岩瀬の兄弟山車は山根・谷地町・旭会の山車と北部の山車である。山根・谷地町から岩瀬へ移り住んだ人が多かったり、山車を造る時同じ山から材を伐って造ったことが兄弟山車になった理由とされている。実は横町と岩瀬もかつては兄弟山であった。ちょっとしたいさかいから袂を分かつに至った。このように山車の兄弟関係といっても極めて流動的なものなのである。なお、観光山車ブッケは昭和三十三、四年頃から行なわれるようになり、現在五、六ケ所で行なわれている。観光協会が祭礼にかかわるのは、この観光山車ブッケに対する若干の謝金を払い、

(注) 左欄の数字は巡行ルート図の番号に対応する。

表2　横町山車の巡行記録

横町山車の巡行記録 '88年9月7日 (番号は図2～4に対応)		
1	16：50	横町西部張番・八坂神社前　出発。
2		横町東部張番　挨拶・手踊り奉納。
3		上新町張番　挨拶・手踊り奉納。
4		岩瀬町張番　挨拶・手踊り奉納。
5		下新町張番　挨拶・手踊り奉納。
6		下岩瀬町張番　挨拶・手踊り奉納。
7		岩瀬上丁張番　挨拶・手踊り奉納。
8		神明社　参拝・手踊り奉納。
9		岩瀬本丁張番　手踊り奉納。
10	22：23	大塚丁張番　手踊り奉納。
11	22：59	岩瀬上丁張番への挨拶順番持ちのため休憩。
12	23：29	岩瀬上丁張番　手踊り奉納。
13	0：05	下岩瀬町張番　手踊り奉納。
14	0：19	下新町張番　深夜のため閉鎖・通過のみ。
15	0：30	岩瀬町張番　手踊り奉納。
16	0：43	上新町張番　深夜のため閉鎖・通過のみ。
17	0：55	横町東部張番　深夜のため閉鎖・通過のみ。
18	1：12	八坂神社前にて手踊り奉納。山車を収納完了。
横町山車の巡行記録 '88年9月8日		
1	10：17	横町西部張番・八坂神社前　出発。
2		北部張番　挨拶・手踊り奉納。
3	10：26	佐竹北家邸　手踊り奉納。Uターン。
		全山車が佐竹北家邸参拝のため一本道を往復するため数々の山車と交差。
4	19：09	東部山車との観光用ぶっけ。3度ぶっけた後，交渉という形式を3回繰り返した末，和解の酒を汲み交わす。
	19：55	東部山車との交差完了。
5	20：40	横町東部張番　手踊り奉納。
6	21：08	駅前通り山車と対面。
	21：53	14回の交渉の末，交差完了。
7	22：15	上新町山車と対面。
	23：08	11回の交渉の末，交差完了。
8	23：17	西部山車と対面。
	23：34	6回の交渉の末，西部山車がぶっけの態勢に入り，横町もそれに続く。ぶっけ。
	23：41	和解交渉の末，酒を汲み交わし三本締め。
	0：04	西部山車との交差完了。
9	0：09	東部上新町張番　手踊り奉納。
10	0：36	スーパー・タカヤナギ駐車場に山車を収納。
横町山車の巡行記録 '88年9月9日		
1	12：45	寄せ囃子が鳴り始める。横町東部張番へ責任者・交渉員が出発の挨拶。
	13：00	スーパー・タカヤナギ駐車場を出発。
2	13：35	旭会張番　手踊り奉納。
3	14：21	三叉路にて休憩。
4	16：54	七日町張番　交渉員に挨拶やり直しのクレームがつく。手踊り奉納。
5	17：21	中央通り山車と対面。
	17：44	4回の交渉の末，交差完了。
6	17：45	西勝楽町山車と対面。
	17：58	4回の交渉の末，交差完了。
7	17：58	七日町山車と対面。
	18：15	6回の交渉の末，交差完了。
8	18：21	薬師堂に参拝・手踊り奉納。
9	18：55	岩瀬山車と対面。
	19：50	6回の交渉の末，岩瀬山車側からぶっけの態勢に入る。ぶっけ。
	0：05	和解交渉の末，交差完了。
10	2：44	西部山車と対面。
	3：00	西部山車との交差完了。
11	3：45	八坂神社前に山車を収納。

置山や舞台への補助金を出す他は一斉口を出さない。昭和四十三年から四十六年まで祭典実行委員会なるものをつくり、観光協会と行政が連合して祭礼に関与し、イニシャティブを執ろうとしたが、各丁内からの反発が強く、祭典実行委員会も解散の浮き目にあった。「祭礼は自分達が長い時間をかけて培って来たもので、自分達が計画し実行するもので、観光客におもねる必要もなければ、行政の手も借りる必要がない」といった意識が強い。自分達の祭礼を自分達で精一杯盛り上げて楽しむのだ、そういう意気込みがひしひしと伝わってくる。

話を山車の曳き回しに移そう。七日夕刻から神明社参詣、八日の午後佐竹邸上覧、九日夕刻薬師さま参詣がごく普通の形である。七日の夕方は神明通りを各山車が南下し、順に曳き手が社殿に赴いてお祓いをしてもらう。その間、一の鳥居の外側に山車をつけ、その場で山車のお祓いを受けた上で手踊りを奉納する。一の鳥居内側境内には舞台があって芝居が演じられる。観覧者は新聞を敷くなどしゃがみ込んで見ている。観覧者と舞台の間はいわば参詣路でかまわずに人々が行き交う。舞台の隣には仮設の今述べた山車のお祓所があり、鳥居の反対側では山車が手踊りを奉納しているという恰好になる。この鳥居を過ぎて階段をのぼり上がった社殿ではおごそかに祭儀が執り行なわれている。その一方で、一の鳥居外の神明通りには、順番を待つ各丁内の山車が列をなし、その周囲にそれぞれの曳き手が揃いの半纏で車座になり、酒を飲み交わしたり歓談している。さらに様々な丁内の半纏を着た友人・知人が入り混れて道路隅のあっちこっちで車座となり、飲んだり談笑する姿が見られる。時には男女の逢瀬に行き当たることもある。こうした光景が真夜中過ぎまで続く。聖俗入り乱れ、混沌とした祝祭空間が神明社を中心に現出されるのである。

八日になると祭礼の焦点エリアが北上し、佐竹邸界隈に移行する。

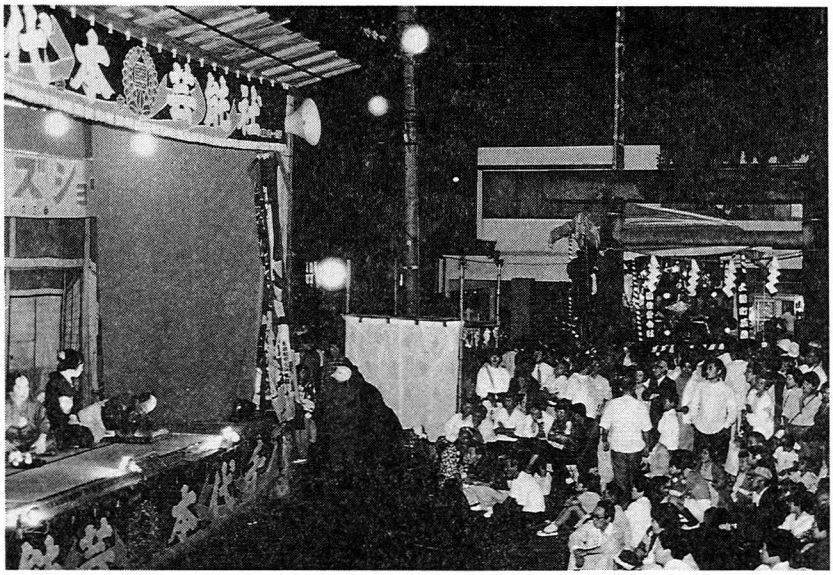


写真9　神明社境内では，舞台とお祓所（中央の白幕）が同居し，鳥居の向うでは山車が踊りを奉納している

写真10　山車の前後で車座になって酒を飲みあう

しかし、この時は火除地を越えた内町（侍町）地域であり、しかも昼間であることも手伝って、整然と山車の曳き回しが行なわれる。九日夕刻以降は一転し、お囃子も物静かな「上り山車」「下り山車」「荷方囃子」等々からせわしくけたたましい「喧華囃子(ぶつかり囃子)」へと変わり、横町十字路、立町十字路を中心に祝祭空間が町中の至る所に散りばめられる。

斥候を放って宿敵の山車の位置を確認し、その動きを先読みした上で行動をおこし、有利な位置で対面して山車ブッケをする。相手を見つけた山車同士が、あっちこっちでぶつかり合う。和解交渉が成立するまで、あのけたたましい「喧華囃子」は鳴りやまず、ほぼ一時間おきに掛け声・歓声がそれに加わる。戦いの合間には、例によって山車の周囲に車座ができ、一升瓶を回し飲みするなど、山車周辺はさながら歓楽街の様相を呈してくる。そうした中で、曳山責任者数名のみ山車の下で真剣に作戦を練っている。こうした状況が明け方まで続き、和解交渉の末ようやく散会となる。喧騒と山車の去った後に残るのは、

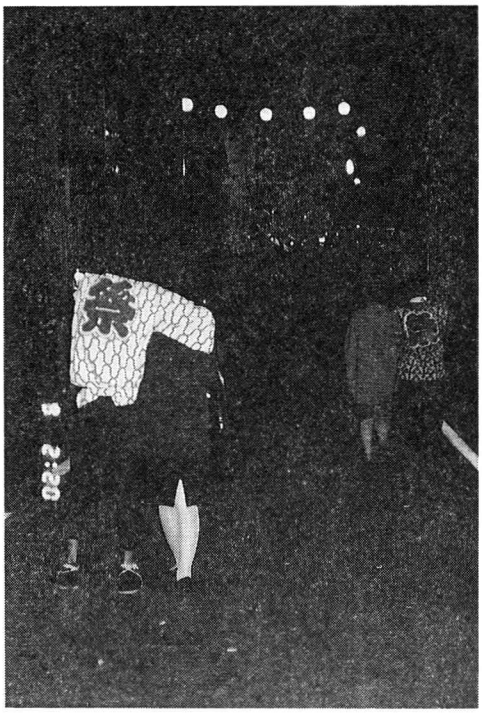


写真11　山車から離れた場所では，さながら歓楽街擬いの風景が見られる

飲み散らかしの空缶その他のゴミの山だけ。明け方の歓楽街の風景そのものである。それも通勤の車が行き交う八時頃ともなると、町の人達によって片付けられ、平凡な日常風景に戻る。いやがらず、労をいとわず道路を掃除する人々の姿勢の中にも、自分達の祭礼は自分達で支えるのだという強い意志が伺える。

四　結びにかえて

神道学者の岸本英夫は、「急激な都市化によって地縁や血縁という概念が人々の心を捉えなくなっているので、人は神社へまいることはあっても魅力ある神社を自由に選んでいる。一種の有名神社集中化がおこっている。そしてその背後には、無数のわびしい地区神社のわびしい姿が隠されている」と言い、氏子組織の崩壊、祭礼の衰退に言及している。[26] これは一九六〇年代始めの頃の発言であり、その後事態はもっと進んでいるだろう。しかし、そのような傾向とは別に、岸本も指摘するように昔よりむしろ盛大に行なわれている例も枚挙に暇がないくらいである。なかんずく京都の祇園祭、大阪の天神祭、浅草の三社祭、秩父の夜祭、高山祭といった伝統ある大社、名社のそれについて見れば、祭礼は再構成されて巨大化したといえる。今まで見てきたように、角館の飾山囃子もそうした祭礼の一つと言えるだろう。

かつて成城大学民俗学研究所の共同研究『山村生活五十年、その文化変化の研究』で、宮城県丸森町筆甫地区の八雲神社の祭について報告した際、地域社会の変化に対応できない祭、つまり具体的には信仰に支えられている祭が、地域の人々によって楽しまれる祭に変貌しない限り、簡略化・消滅化の方向をたどらざるをえないことを指摘した。[27] 角館の飾山囃子についていえば、各山車の動きを読みながら知力を集めて作戦を練り、相手山車との交渉、駆け引きを経て山車ブッケに至るという、対抗意識と緊張感を持つ中で仲間同士の連帯感を味わい、しかも熱狂できるというように、知的ゲームとして見事なまでに仕立て上げられている。それが人々を惹きつけてやまない魅力なのであり、それ故にこそ盛大を極める一方なのである。

中村は先の論文の中で「丁内同志の対抗は、少なくとも現在では日常生活の別の次元で行なわれる」、「祭における争いは日常生活にまで延長されることはなく、翌年の祭まで棚上げされる」とし、祭礼はあくまで非日常的要素から成り、決して日常生活に還元されえないものだと言う。[28] しかし、若者会無尽、熟年無尽の会合で一しきり話題となり、様々な行事における寄り合いで常に話題となるのは飾山囃子の山車ブッケのことであり、丁内意識、対抗意識は決して翌年まで棚上げされるというものではない。折ある毎に意識を昂揚させてエネルギーを小出しにしていた鬱積を、一挙に放出するからこそ、飾山囃子がこれほどの盛り上がりを見せるのだといえる。

註

(1) 福田アジオ『日本村落の民俗的構造』弘文堂　一九八二年　一～八頁。宮田登「地域民俗学への道」(和歌森太郎編『日本文化史学への提言』弘文堂　一九七五年三一九～三四七頁)

(2) 民俗学、歴史学、考古学三者の協業による共同研究であるが、民俗研究部を中心に「民俗の地域差と地域性」なるテーマで取り組んでおり、「中間報告Ⅰ」一九八七年と「中間報告Ⅱ」一九八九年が刊行されている。

(3) 米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店　一九八九年　一～二七九頁。大林太良『東と西、海と山～日本の文化領域～』小学館　一九九〇年　一～二六三頁。

(4) 柳田國男「都市と農村」(『定本柳田國男集』第一巻　筑摩書房　一九六九年)二三九～三九一頁。

(5) 米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』別掲書　一～三一頁。

(6) 『古河市史民俗編』同市編纂委員会刊　一九八五年

(7) 拙稿『民俗学における地域性研究の予備的考察』(竹田旦編『日本の民俗社会の構造』国書刊行会　一九九〇年)六八七～七一三頁。

(8) 松平誠「都市の社会集団(5)～秩父の祭りと生活」(『応用社会学研究』二六号　立教大学社会学部　一九八五年)

(9) 在郷町という場合、法的に農村として把握される町のみを在郷町と規定する論者と、法的に町とし把握されたものでも、三都や城下町などの大都市と異なる在方の小都市・町場として在郷町に含める論者がある(『国史大辞典』第六巻、吉川弘文館　一九八〇年)。ここでは後者の立場をとる。

(10) 『秋田県大百科』

(11) 『角館誌・北家時代編上』角館誌刊行会　一九六七年　二二〇～二二一頁。

(12) 『角館誌・明治時代大正時代編』角館誌刊行会　一九六八年　三三一～三三二頁。

(13) 中村孚美「町と祭り～秋田県角館町の飾山囃子の場合～」(『日本民俗学』七七号　一九七一年)三〇～五三頁。

(14) 『角館の祭典』角館町　一九九〇年　二～五頁。

(15) 富木耐一『角館の祭り～神と人間の接点から～』無明舎　一九八二年　五八～六七頁。

(16) 現在多くの山車は若者が維持、管理しているが、町内で維持・管理する山車を町内山車という。現在中央通りと七日町だけがこの形をとっているらしい。かつては町内山車に対しては、交渉する時も気がねしたという。

(17) 富木耐一「私のお祭り修業記」(『点描かくのだて』十七号　一九九〇年)二六頁。

(18) 横町柏谷圭一郎氏ご教示による。

(19) 横町柏谷圭一郎氏、佐藤徳雄氏ご教示による。

(20) 横町柏谷圭一郎氏ご教示による。

(21) 横町小柳光三氏ご教示による。

(22) 『田島祇園察におけるおとうや行事』田島町教育委員会　一九八六年。

(23) 青木治『安曇野の歴史・穂高神社とその伝統文化』穂高神社社務所　一九八八年　二〇三～二〇五頁。

(24) 中村孚美「町と祭り～秋田県角館町の飾山囃子の場合～」前掲論文やタウン誌『点描かくのだて』各号に描かれている。

(25) 下り山車というのは、神明社なり佐竹邸、葉師さんを参詣した後の山車をいう。上り山車は参詣に出向いている状態の山車で、両者が交差する時は上り山車に交渉権がある。

(26) 岸本英夫「神道の都市化」(『国学院大学日本文化研究紀要』十六巻　一九六四年

(27) 松崎憲三・大本憲夫「山村生活の再編～宮城県伊具郡丸森町筆甫～」(『西郊民俗』百二八号　一九八九年　三～六頁。

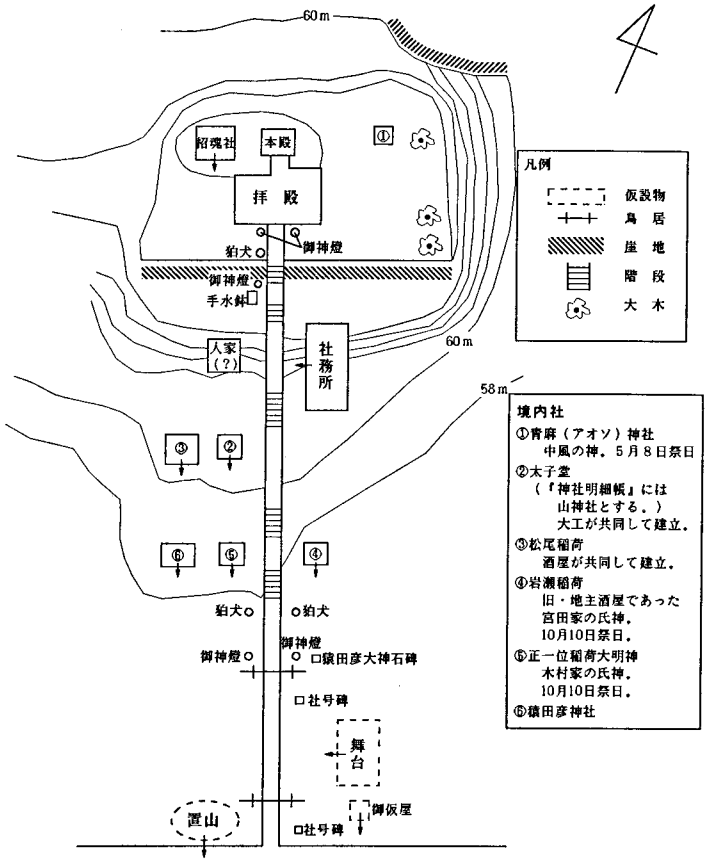
(28) 中村孚美「町と祭り～秋田県角館町の飾山囃子の場合～」前掲論文。

〔付記〕 本稿の執筆に当たっては、角館町長高橋雄七氏、横町の柏谷圭一郎氏、佐藤徳雄氏、小柳光三氏をはじめ年番長や若者といった多くの方々にご教示いただいたほか数々のご便宜を得た。末尾ながら深謝致す次第である。また横町のみならず各張番の方々には一方ならぬお世話になった。

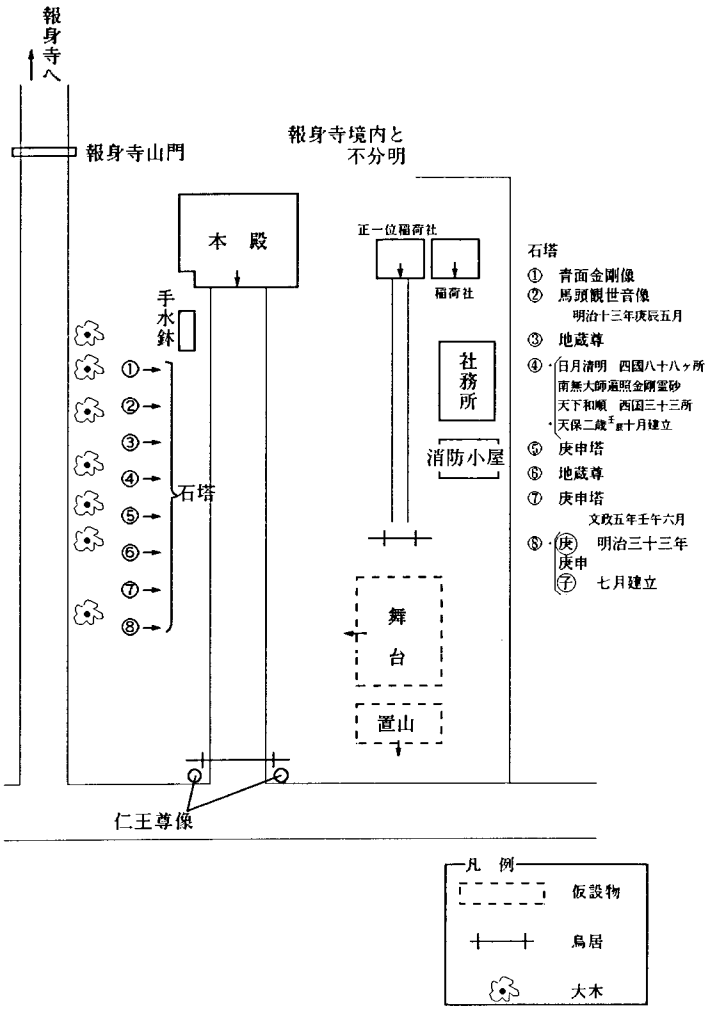
さらにこの調査には三年にわたって成城大学文芸学部文化史学科の学生の協力を得た。参加学生は以下の通りである。一九八八年度―前田香、新井まり子、石井真由美、生形加寿子、菊田ゆき、白石弓子、高橋潤次、傳留美子、長山泰久、那須美奈子、長谷川容子、三浦良泰、船山明夫。一九八九年度―松崎かおり、内山弘一、船山明夫、小泉千春、三林千夏。一九九〇年度―松崎かおり、船山明夫。

(一九九〇年九月稿了)

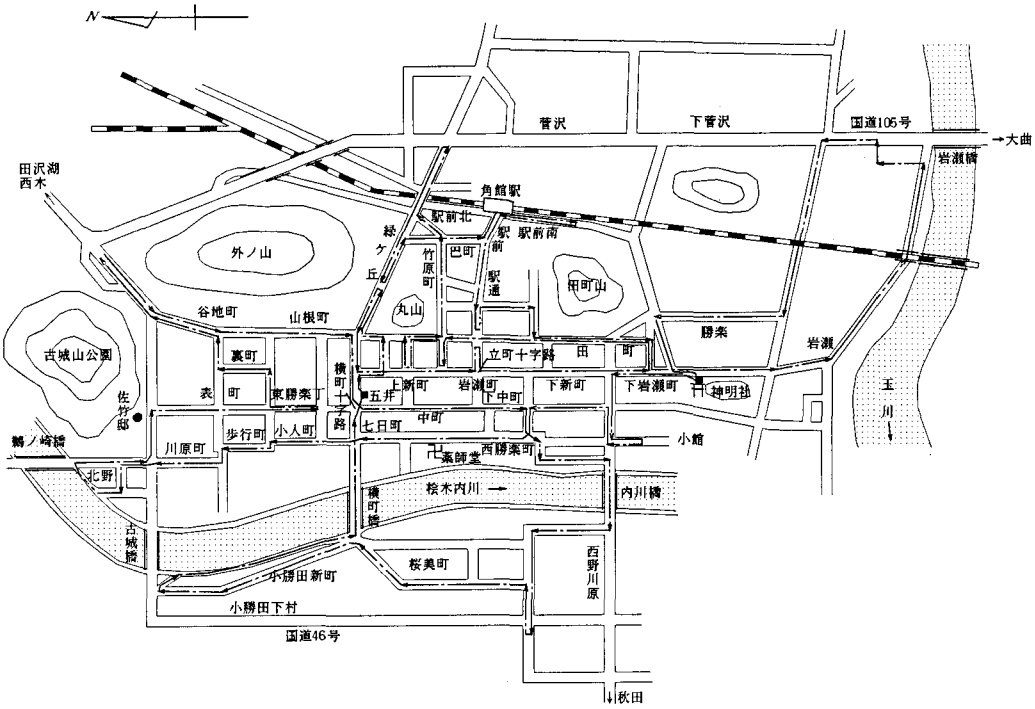
(成城大学　文芸学部)



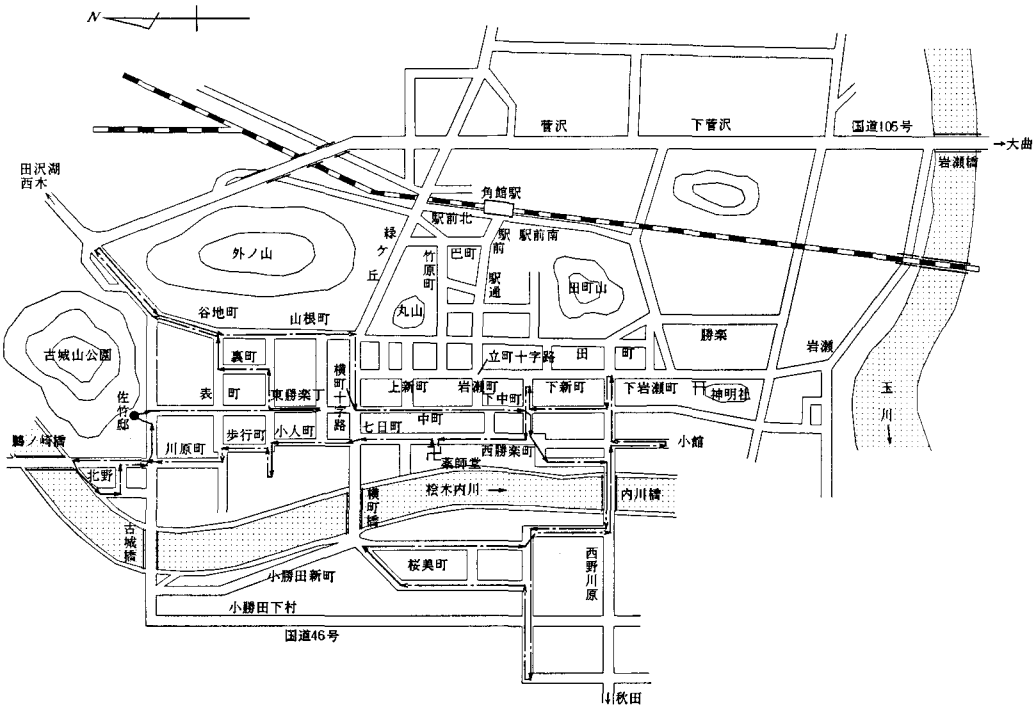
参考資料1　神明社境内図



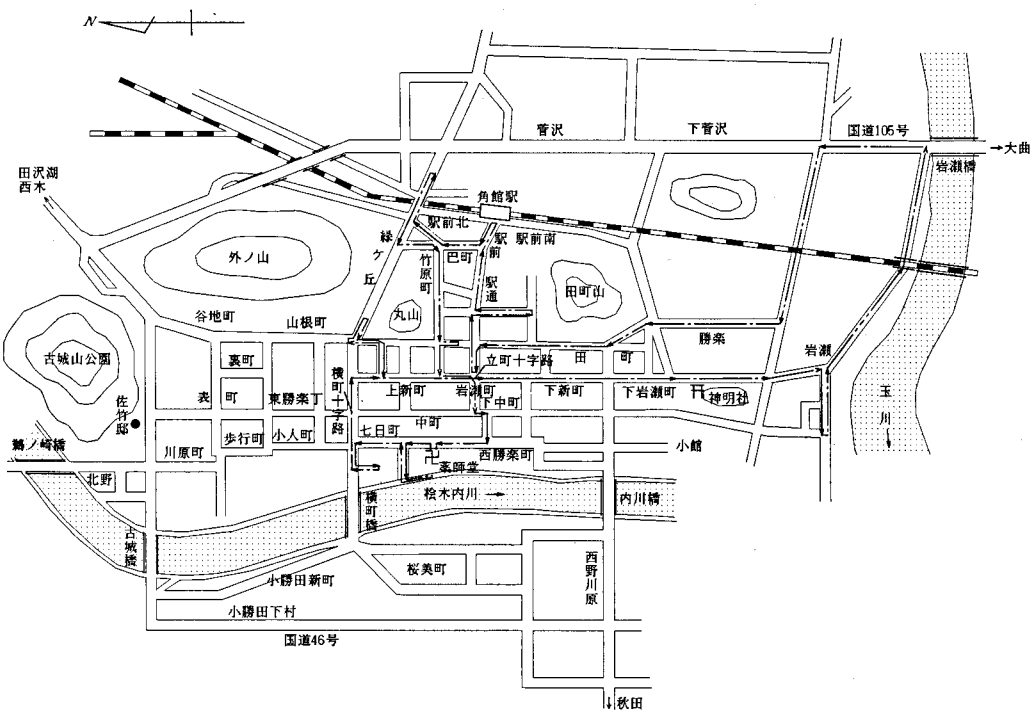
参考資料2　薬師堂境内図



参考資料３　神明社神輿巡行ルート図（９月８日）



参考資料４　薬師如来巡行ルート図（午前）（９月９日）



参考資料5　薬師如来巡行ルート図（午後）（9月9日）

Oyamabayashi in Kakunodate City—A Festival in a Local City

MATSUZAKI Kenzô

Due to rapid urbanization, land or blood are no longer considered to be rational means to bond people together. Because of the lost bondage, nearly every chinjyusha, or a local shrine, its organization of local people and its festival are in constant decline. At some shrines, on the other hand, their festivals are celebrated on even larger scales. Particularly, traditional festivals such as the Gion Festival in Kyoto, Tenjin Festival in Osaka, Sanja Festival in Tokyo, or Yomatsuri Festival in Chichibu are reorganized into grand-scale festivals. Oyamabayashi Festival in Kakunodate may belong to such festivals.

Unless festivals are reorganized to accommodate themselves to the changing local community, to use more concrete terms, unless they are transformed to an entertaining festival enjoyed by the local people from a religious festival supported by worshipers, they are doomed to simplification and, in the end, extinction. As for Oyamabayashi in Kakunodate, the festival is successfully designed as an intellectual game to raise a sense of rivalry, bondage, tension as well as excitement by clashing their Yama (a festival car) with each other after careful plans, negotiations, and preliminary pushing and pulling. Oyamabayashi Festival has an irresistible attraction.

According to Fumi Nakamura, a festival consists only of uncommon elements wihch are incompatible with ordinary life. But, one of the main topics of any meeting, whether it is a meeting of youth, a meeting of adults, or any other one in Kakunodate is always about Yama clashing, and the rivalry and competition felt in the festival are never totally lost from people's minds until the next festival. The pent-up frustration that comes from controlled release of energy before the festival, it is believed, causes the people to give violent joy in making full release of it on the festival day.